「クロス」させる感性を培う

「自由に書く」という方針によって、まるで紀行文を読む感じで本書に入っていける

室沢 毅

▶ 澁谷利雄・加藤 巌 編
アジアから学ぶ "よい"暮らし、"よい"人生
3・30刊 四六判198頁 本体1300円
八月書館

本書で採り上げられるアジアは、スリランカ、マレーシア、台湾、中国、韓国、ミャンマーといった国々だ。執筆者たちの専門領域は、文化人類学、人的資源論、国際貿易論、開発経済学、国際経営論、画家と実に様々だが、編者によれば、『思い切って自由に書く』という方針の下、いつもは『硬い』論文を書く人たちがのびのびと自らのアジア体験を描いている」から、まるで紀行文を読む感じで本書に入っていくことができる。ただし、台湾、中国、韓国に関しては幾分、他の文章群と角度が違うのだが、それでも、わたしにとっては刺激的だった。

伊藤道興・坂本愛「台湾から学ぶ日本のポップカルチャー」では、アジアの中で最も親日度が高い台湾ということを充分承知していたつもりだが、「日本ではあまりその存在を知られていない」ものでも、「優良なコンテンツとして認められて」、「有効活用」していると述べられていて、驚くとともに、納得したといえる。もう、二、三年前のことになる。わたしがよく知っている飲み屋兼定食屋が、マイナーなTV局で放映されたアニメのドラマの中で採り上げられたことがあるのだが、以来、「聖地」となって、わざわざ台湾からアニメ・ファンが大勢、訪れるようになったという（日本人は、僅かしか来ないらしい）。納得したというのは、親近な例が、わたしにはあったからなのだ。

金雅美「中国と韓国のビジネスエリートMBA」は、表題が示す通り、MBA（経営学修士）を有することは、日本では、「なんとなくキャリアによさそうなもの」といった感じだと思うが、中国や韓国では、『なにかいいもの』ではなく、『すごくいいもの』なのだ。彼らの話をよく聞いてみると、（略）日本人には驚きの『成り上がり美談』ばかりだ」という。

ミャンマーが旧ビルマであったことは、アウン・サン・スー・チー氏をめぐる問題でここ何十年にもわたって報道されてきたから知っているが、本書で"スリランカ"という表記を見て、一瞬、どこにあったのかなと思った。いまでは、紅茶よりコーヒーの方が圧倒的に好きだが、子供の頃は、セイロン紅茶と喧伝されたものをよく飲まされていたので、セイロンがどこに位置するのかは知っていた。イギリスの植民地から独立して自治領になったのが48年。72年に国名をスリランカとし、自治領から完全独立したことを、改めて確認し知ったことになる。関心を持たなければ、わたしは、いまだに六十年代の小中学生時の社会科教育の残滓のなかにいたことになる。実に情けないと思う。

「上座仏教を土台とするシンハラ民俗社会では、人間と動物の境界はむしろ不分明である。動物は一般に人間より劣位に位置付けられているとはいえ、等しく涅槃を目指す存在である。」（澁谷利雄「スリランカでイヌ、カラス、スズメを見ながら考えたこと」）

「マレーシアのような『怒らない社会』では、だれかが失敗しても、怒ってはいけない。もちろん、こうしたマレーシアの社会は若者にも寛容だ。若い失敗者に対して社会が寛容であれば、彼らが新しいことへ（再）チャレンジしやすいのはいうまでもない。」（加藤巌「マレーシアの『怒らない社会』から学ぶ」）

「マレーシアのラマダーンの様子は、例えていうならば、私たちの師走と正月のそれに似ている。せわしない感じ、浮き浮きとした感じ、そして新たな時を迎える華々しい感じである。」（松田朋子「マレーシアの豊かで美味しいラマダーン」）

自分の無知を棚に上げて、ただこれらの文章に感嘆してもいいのだが、未知のことを理解するためには、自分たちとは違うという意識を持つのではなく、まず、どこかにクロスさせて見通すことができる様態があるはずだと思うことなのではないだろうか。飼い猫や飼い犬の「死」は、無宗教者にとっても悲しいことだし、寛容であることは、わたしたちの日常にとっても不可欠なことだ。断食という言葉だけを聞いて、ラマダーンを異界の人々の世界のことだと境界線を引いてはいけないのだ。自分たちの師走と正月を不思議な感覚で見ている人が大勢、存在しうることを、寛容性を持って認めるべきなのだ。他の国々、地域の"暮らし"から学ぶということは、そういうクロスさせる感性を培うことのような気がする。

（社会批評）